

小・中・都立学校

平成 8 年 度

教育研究員研究報告書

書 写

東京都教育委員会

平成 8 年度

教育研究員名簿（書写）

書 写	地 区	学 校 名	氏 名
◎ ○	港	神 応 小	阿 部 修 子
	目 黒	東 山 小	西 島 能 婦 子
	渋 谷	山 谷 小	吉 澤 実 知 子
	北	荒 川 小	岸 深 雪
	江 戸 川	小 松 川 第 二 小	伊 藤 安 紀 子
	府 中	府 中 第 十 小	熊 谷 多 津 子
	文 京	文 林 中	黒 田 久 美 子
	世 田 谷	駒 沢 中	市 川 知 明
	葛 飾	小 松 中	横 山 ゆ り か
	立 川	立 川 第 五 中	中 川 尚 美

◎=世話人 ○=副世話人

担当 教育庁指導部初等教育指導課指導主事 笠 原 慎 太 郎
 教育庁指導部中学校教育指導課指導主事 河 野 庸 介

目 次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の構想	
	1 研究の基本的な考え方	2
	2 研究の方法と手順	2
	3 研究の全体構想図	3
III	研究の内容	
	1 小 学 校	4
	基礎的・基本的事項	5
	2 中 学 校	7
IV	実践事例	
	<小学校第2学年>	9
	<小学校第3学年>	12
	<小学校第6学年>	15
	<中学校第1学年その1>	18
	<中学校第1学年その2>	20
V	研究のまとめと今後の課題	24

「自ら考え基礎・基本を身に付け活用できる書写指導の工夫」

I 研究主題設定の理由

これからの教育課題として求められていることは、児童・生徒に、いかなる社会の変化においても自分で課題を見つけ、自ら学び、主体的に判断・行動し、よりよく問題を解決する資質や能力としての「生きる力」を育てていくことである。国語科書写では、変化する言語環境や情報化社会の中で、言語活動の基本となる表現伝達手段としての文字指導をその役割として担っている。

近年、ワープロやパソコンの普及に伴い、自らの手で鉛筆を使って正しく整った文字を書くことへの関心が薄くなってきている。児童・生徒の学習ノートやレポート、手紙など日常生活の書写活動において書かれた文字は、点画が不正確であり字形が粗雑で、デザイン化された読みづらい文字が目立つ。しかし、児童・生徒の意識調査から、文字を書写することが好きであり、正しく整った文字を書けるようにしたいという意識が読み取れる。学習の原動力は、児童・生徒が意欲をもって課題に取り組むときに発揮されるものである。与えられた課題を消化させるだけの授業では、児童・生徒の意欲は育たない。どうすればもっと整った字が書けるようになるのか、自分が克服していく課題は何かを限られた授業時間で児童・生徒自身に気付かせ、自ら考えて取り組ませるための指導の工夫を考える必要がある。

児童・生徒が身に付けておかなければならない基礎・基本である、文字の点画・字形・配列などは、学年が進んで文字を書き慣れてくるにしたがってなおざりになってくる実態が報告されている。正しく整った文字を書くための基礎・基本の指導事項は学年の発達段階によって異なる。それを明らかにし、定着させるための指導の手だてを工夫する必要がある。

児童・生徒が文字を書くことに上達の喜びや自信を持てば、学習ノートばかりではなく、日常の書写活動へ生かされる場面は多い。また、毛筆による書写に関しては、硬筆による書写の基礎を養うこととなっている。例えば中学校における行書入門期の点画の基礎・基本が定着すれば、硬筆による書写の効率よい速書へと生かされていくと考えられる。

以上のことから本年度は、

- 文字を正しく整えて書くための自分の課題に気がつき、意欲的に取り組むことができる児童・生徒。
- 基礎・基本を身に付け、日常の書写活動に生かすことができる児童・生徒。

を目指し、研究主題を「自ら考え基礎・基本を身に付け活動できる書写指導の工夫」と設定した。

Ⅱ 研究の構想

1 研究の基本的な考え方

これからの書写指導においては、児童・生徒が文字への関心や意欲を高め、文字を正しく整えて書く能力を伸ばし、学習したことを日常の生活に生かしていこうとする態度を育てることが大切である。そのためには一人一人が自ら考え、自分の課題に取り組む学習活動を重視する必要がある。本研究では、文字を正しく整えて書くために、自ら考えさせるための学習過程と、基礎・基本を身に付けさせる指導の手だてを工夫した授業を創造する必要があると考えた。そこで、次の方法に焦点を絞り、研究を進めることにした。

(1) 自ら考えるための指導の工夫

一人一人が自ら考えるためには、まず課題意識を明確にもつことが重要である。自分の試し書きと教科書の文字とを照らし合わせることで、児童・生徒が気づき、自ら考える力を養い、自分の課題をもつことができると考えた。課題に気づかせる具体的な方法として、分解文字、TPシートなどの具体物の操作、書き込みや発表などの活動の場を設定、基準の提示、教材の選定などを行うことが重要である。

(2) 基礎・基本を身に付け活用できるための指導の工夫

児童・生徒が基礎・基本を身に付けるためには、自分の課題をはっきりさせなければならぬ。その課題を解決させるための手だてとして、多様な練習用紙の作成、手を添えての筆使い指導、基準の提示、機器の利用などが有効と考える。また、課題達成の喜びを味わわせるために、一時間の学習の中で、いろいろな評価の工夫を行うことが必要である。

2 研究の方法と手順

(1) 研究の組織と方法

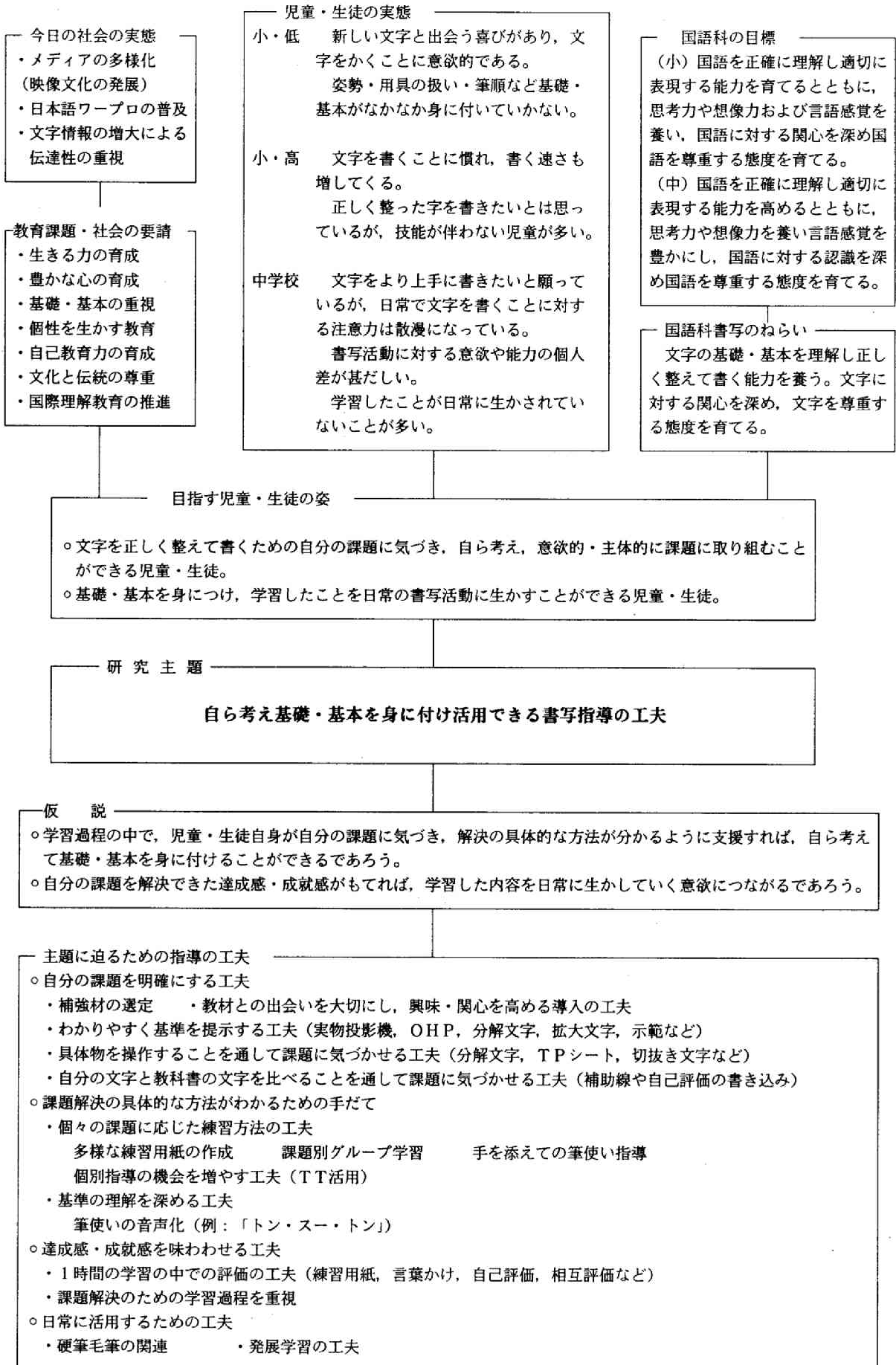
本年度の研究員は小学校6名、中学校4名の計10名である。そこで、小学校分科会と中学校分科会の2分科会を組織し、2分科会ともに硬筆指導と毛筆指導との関連を重視しながら、さらに、小・中学校の書写指導の関連や系統を踏まえ、相互の連携を深めるよう配慮した。

(2) 研究の経過

1学期は研究員相互の平素の書写指導の実態、様子について報告し合い、授業研究を行いながら、本年度の課題をとらえ、検討を重ねた。また並行して本年度の研究主題や内容について話し合い、共通理解を深めるにようにした。御岳の研究集会では、1学期の授業を分析し、整理する中で、研究主題や内容についてさらに深め、具体的な指導の手だてを考えた。また、2学期に予定されている授業の学習指導案について検討し、主題に迫るための本年度の重点について話し合った。その結果、2学期より効果的な指導法を考え、研究授業を通して検証することとなった。

6月7日	中1年	楷書(字形)	9月26日	中1年	行書(点画の連続)
6月20日	小3年	おれ	10月29日	小3年	点画の方向
7月2日	小2年	字の形	11月8日	小6年	文字の大きさ

3 研究の全体構想図



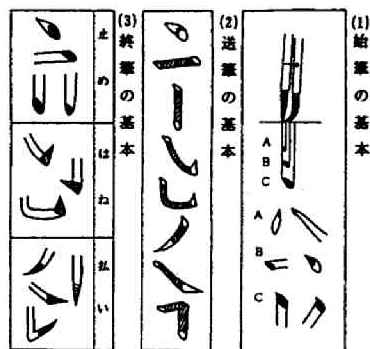
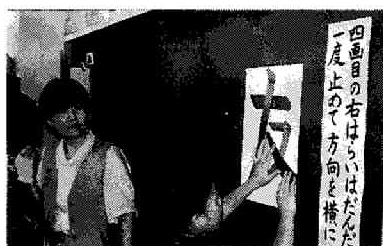
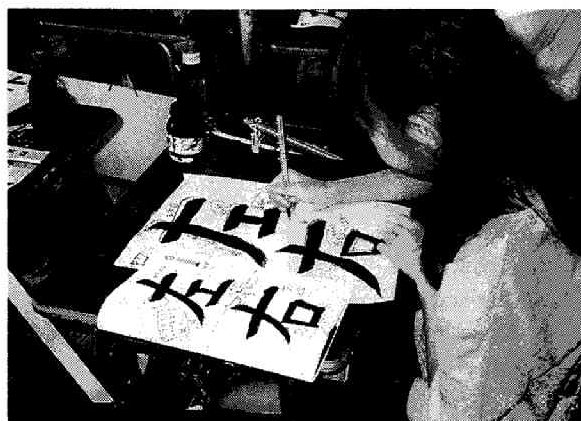
Ⅲ 研究の内容

1 小学校分科会

(1) 自ら考えるための指導の工夫

児童の学習意欲を喚起するために一人一人に課題意識をもたせることが重要であると考えた。具体的な手だてとして――

- ① 書き込み作業（右写真）を通して一人一人の課題をもたせた。
- ② 基準を理解しやすくするために、分解文字（下写真）を使いながら、考える場を設定した。



(2) 基礎・基本を身に付け活用できるための指導の工夫

- ① 何を指導したらよいかを明らかにするために、基礎的・基本的事項を洗い出し「国語科書写基礎的・基本的事項」系統表を作成した。（5P6P参照）



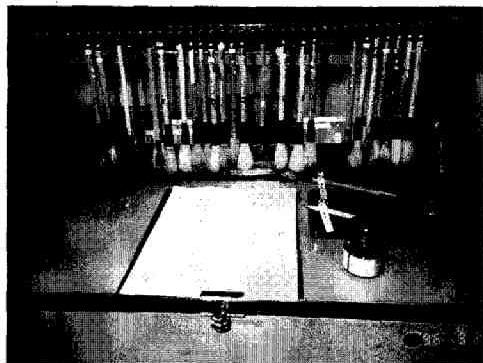
- ② 基本的な筆使い<始筆・送筆・終筆>を知らせるとともに、漢字の筆順の基本原則を理解させた。

- ③ 試し書きからまとめ書きに至るまでの学習過程の中で、多様な練習用紙を作成し使用させた。
- ④ 視聴覚機器の利用や、手を添えての筆使いの指導を行った。

児童は、筆洗いやその他、用具の取り扱い、文字を書く姿勢など、学習に取り組む態度をしっかりと身に付けたり、文字を書く上での基礎・基本が理解できると、文字をより正しく書こうとする意識が高くなる。さらに、応用・発展の要素を持つ文字を練習することで、文字感覚が養われ、活用することができるようになる。文字を正しく書くには、考える場や、応用・発展の場を取り入れた学習過程の工夫が、大切であると考えた。



	低		中		高	
	1年	2年	3年	4年	5年	6年
	正 し い 字 形 ・ 筆 順					
基礎・基本 知識「理解」	○点画の長短, 方向	○点画の接し方, 交わり方 方向	○文字の組み立て方 ●用具の扱い ＜準備, 片付け＞ ●筆使い ＜始筆, 送筆, 終筆＞ ＜点画の長短, 方向＞	○文字の大きさ, 配列 （読みやすく書く） ○点画の接し方, 交わり方 方向 ●文字の中心, 画間	○字形, 大きさ, 配列 →(よしあしの判断)	○字形, 大きさ, 配列 →(理解・実践)
姿勢	いすに浅く腰かける 背筋を伸ばす 両足をつける ○正しい鉛筆の持ち方 ・机, イスの調節 ・用具の置き方		(正 し い 姿 勢 の 実 践) ●正しい筆の持ち方	(筆 ・ 鉛 筆 の 持 ち 方 の 意 識 化)		
態度 意識「心構え」	・興味, 関心をもつ ○用具を整える ＜鉛筆を削る＞ ＜硬筆用下敷きの利用＞ ・丁寧にゆっくと書く		課題を持って書く ●用具を整える ＜筆, 硯の手入れ＞ ○毛筆学習の成果を 硬筆に生かす			

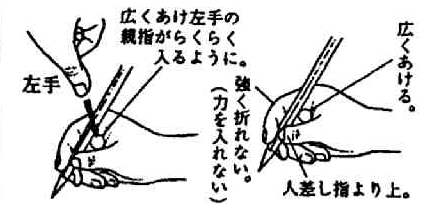
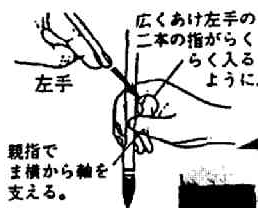


筆かけの作成

せんたくバサミの利用

空きビンの利用

目玉クリップの利用



背筋ピン！
おしり半分、足ベタタンコ
手は三角、筆は立て・・・



2 中学校分科会

国語科書写の指導のねらいは「文字を正しく整えて速く書くことのできる能力を身に付けさせること」である。授業で書く文字の量が著しく増える中学校においては、正しく整った文字を速く書きたいという気持ちはある。しかし日常生活の中では文字を書くことがあまりにも当たり前のこととして受け入れられてしまい、文字に対する意識が希薄になりつつある。だからこそ、書写の指導においては関心を高める必要がある。生徒は教科書の文字の学習にはよく取り組む反面、それが日常生活の中になかなか生かされていかない。書写の時間で学習できる文字は限られている。それが基本となり他の文字にも広がり様々な表現活動の中で生かされていくためには、受け身の学習ではなく自分自身が考え課題を見つけそれを解決していく学習過程が大切だと考える。さらに課題解決のためには、文字の特徴をつかみやすい毛筆で基礎を学び、硬筆で生かせるよう単元の計画を練ることにした。このような観点から、「自ら考え基礎・基本を身に付け活用できる書写指導の工夫」という研究主題に迫っていくことにした。

(1) 自ら考えるための指導の工夫

① 生徒の第1時作品分析による特徴の把握

試し書きした後、教科書の文字と自分の文字をじっくりと見比べ、自分の課題を見つけ、どうすればその課題を解決できるか考える過程を学習の中に意識して盛り込むことにした。「どうすれば解決できるか考える」際に、適切な支援が必要であり、生徒が課題としやすい箇所を確実に把握し、それを生徒にフィードバックした。そこで生徒自身の文字と向き合い、「どうすれば？」と考えられる材料を提示することができた。

② 課題別グループ学習

自己評価し自ら見つけた課題について、次の時間に同じ内容をもつ生徒をグループに分け、課題別グループ学習で授業に臨んだ。同じ課題をもつ意識から、生徒一人一人の課題意識がより明確になり、常に考えながら書く姿勢が見られた。また、課題にそったポイントの指導が小集団の中で行えるため、個に応じた支援がしやすくなった。毛筆の場合、筆使いの基本が身に付いていないと明らかな進歩はなかなか望めない。しかし課題として取り上げたところについては進歩が明らかになった。グループで自発的に相互評価と自己評価を行い、達成感・成就感つながった。

(2) 基礎・基本を身に付け活用できるための指導の工夫

① TT (チームティーチング)

TTは支援する側の目・手が倍になるので、書写の授業では大きな力を発揮する。初めは中心になって授業を展開するT1とそれを補助し学習が遅れ気味の生徒に声をかけていくT2という形で授業を試みた。生徒に「自ら考



え」させる取り組みを進めていく中で、その單元ごとのお互いの役割分担を明確にし、主と従という関係からどちらも主となる授業展開となるよう努めた。その役割分担は單元によって異なるが、それぞれが指導目標を常に頭に置き基本的な事柄の定着をはかるための支援を重視した。その結果、生徒の手を取って基本的な筆使いを確認させること、文字のもつ形に気づかせることなど、「基礎・基本を身に付ける」ための支援が行えるTTによる指導は有効であった。



② 教材・教具の活用

ア 練習用紙は単元の目標に沿ったもの、かつ生徒の課題解決に有効に使えることを意図して数種類用意した。部分練習から全体へ進めるよう配慮して作成したが、練習用紙に頼りすぎ「考え」ながら基礎・基本を学ぶ姿勢が薄れる面があった。そこで自分の課題にあったものだけに限定し、半紙による練習へと進ませるよう配慮した。

イ 実物投影機・水書板・拡大文字・分解文字・TPシートなどを使い、筆の動きや文字のバランスなど具体的に示した。

③ 評価の工夫

ア 自己評価カードを年度当初から使い、1時間ごとの学習の目標を確認し、生徒の課題意識を明確にした。また、授業の終わりに学習の目標がどの程度達成できたかを自己評価することによって、次時への課題意識につなげていくよう工夫した。初めは硬筆との関連から毛筆で学習した文字を自己評価カードの中で硬筆で数回練習する欄を設けてみた。これは時間が不足し雑に書いてしまう傾向がでてきた。そこで教材によっては右図のような自己評価カードを作成し直し、点画の省略など難しい内容のものは硬筆で書くことを導入として取り扱い、毛筆へと進むという工夫を試みた。

1年 組 森氏石	
六 行書の筆使いと字形(点画の省略・筆順の交代)	
林 抄 紅	点画を省略する行書の書法
林 抄 紅	
花 取 葉	楷書と違い、筆順で書く行書の書法
花 取 葉	
自己評価	
点画を省略する行書の書法が理解できたか。	<input checked="" type="checkbox"/>
楷書と違い、筆順で書く行書の書法が理解できたか。	<input checked="" type="checkbox"/>
紅筆の文字の筆順がわかったか。	<input checked="" type="checkbox"/>
自分の筆順、のよい点・悪い点がわかったか。	<input checked="" type="checkbox"/>
悪い点を改善するよう努力できたか。	<input checked="" type="checkbox"/>

イ 評価については、作品主義に陥らないよう注意して、自己の課題が解決できたかを中心において評価した。試し書きや教科書の文字に比べて、まとめ書きで進歩したところに赤丸をつけたり、余白に良くなった点を自分の言葉で書き込ませたりした。また、試し書きとまとめ書き2枚を並べて掲示することによって、生徒一人一人の課題とした部分の進歩を自覚でき、成就感があり、意欲的に学習に取り組むようになった。



IV 実践事例

<小学校 第2学年>

1 単元名 字の形・かたかなのひょう

2 教材 「南・月・四・今」

3 単元の設定の理由

字の形については、一学年で既に学習している。本単元では、◇（ひし形）の外形文字を新たに加えた指導である。一学年時の漢字より画数が多く、形のとりにくいやや複雑な文字について、外形を意識させながら書かせることを目的としている。

また、「土（つち）→地（つちへん）」「雨（あめ）→雪（あめかんむり）」などのように、一文字がへんやかんむりなどの文字の部分になることによる字形の変化についても、譲り合いの原則から理解させる。これは、三学年の学習内容である「文字の組み立て方」に発展していく内容である。

平仮名の字形については一学年でひととおり学習している。片仮名についても一学年より少しずつ学習を積んで来ており、本単元でまとめとして片仮名五十音を書く。

片仮名の字形や筆順を中心に学習させながらも、止め・はね・払い・折れ・曲がり、画の長さや方向について矯正させたい。以上の点を考慮して、本単元を設定した。

(1) 自ら考えるための指導の工夫

① 学習のめあてや基準が明確になるように、教材文字とTPシートを提示して、課題が具体的に捉えられるようにする。

② 教材文字と自分の文字を比較しながら、書き込み活動を取り入れる。

(2) 基礎・基本を身に付け活用できる指導の工夫

① 自分の文字への書き込みを通して、基準を意識しながら取り組めるようにする。

② 練習用紙を使い、他の文字についても基準を意識しながら書いたり、言葉集めをしたりして、活用を図るようにする。

4 児童の実態

この時期の児童は、新しい文字に対してはとても興味や関心が高く、毎日の練習時間を楽しみにしている。しかし、日常の文字に対しては、ていねいな子もいるがほとんどの子は意識せずに書いている。

意識調査の結果、80%の子が字を書くことが好きで、ていねいに書いていると答えている。姿勢については60%と低く、筆順については80%位となっている。実態は、丁寧さについては意識している子が80%でも、実際に丁寧なのは60%と下がり、その中でも整っているのは35%とさらに少なくなる。

この意識と実態の違いに気づき、どこをどのように改善していけばよいのか考え、整った字の書き方を身に付けていく必要がある。学習意欲の高いこの時期の児童一人一人が、意識して学習に取り組めるように、効果的な指導を工夫していきたいと考えた。

5 単元の目標

- 外形などに注意して、漢字を書くことができる。
- 字形や筆順に注意して、片仮名五十音を書くことができる。

6 指導計画（3時間扱い）

第1時 字のだいたいの形に気をつけて書く。（本時）

第2時 字の形の変わり方を知る。

第3時 字の形の筆順に気をつけて、丁寧に片仮名を書く。

7 本時の指導（3時間扱いの1時間目）

(1) 目標 字のだいたいの形に気をつけてかくことができる。

(2) 展開

学 習 活 動	教 師 の 支 援 ・ 留 意 点	主 題 と の 関 連
<p>1 学習のねらいを知る。</p> <p>2 四文字を試し書きする （南・月・四・今）</p> <p>3 それぞれの漢字の形を 考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 1学年で学習した字の形を想起させる。 □□ □ (△▽○) 本時は◇を加え、字の形に注意して書くことを知らせる。 目あてを一斉に読ませる。 空書きにより文字と筆順の確認をさせる。 どの形に当てはまるかを考えさせる。 他の習った漢字についても考えて分けさせる 	<p>基礎・基本</p> <p>自ら考える</p>
<div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div data-bbox="320 1099 820 1503"> </div> <div data-bbox="868 1099 1367 1503"> </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <p data-bbox="411 1525 767 1563">(既習文字を四種類に分ける)</p> <p data-bbox="932 1525 1287 1563">(教材文字を四種類に分ける)</p> </div>		
<p>試し書きの文字の形の確認 課題・注意点を知る。</p> <p>4 既習文字の練習</p> <p>5 感想・今後の課題</p> <p>次時の予告</p>	<ul style="list-style-type: none"> 試し書きを赤鉛筆で直させる。 直した所を発表する場を設定する。 言葉集めもするよう支持する。 練習用紙や字の形についての感想を発表させる。 	<p>考える・気づく</p> <p>基礎・基本 活用 考える</p>

(3) 評価

- 字のだいたいの形に気づくことができたか。
- 字のだいたいの形に注意しながら書くことができたか。

8 考察

(1) 自ら考えるために

教材文字との比較による、自分の字の課題の発見が大切である。児童は、今まで習った字の形を想起し、いろいろな形に字を当てはめてみて、字には形がある事を理解した。更に、自分の字についても自ら考え、気づくことができた。この点で、赤鉛筆での書き込みやTPシートの重ね合わせは効果的と考える。

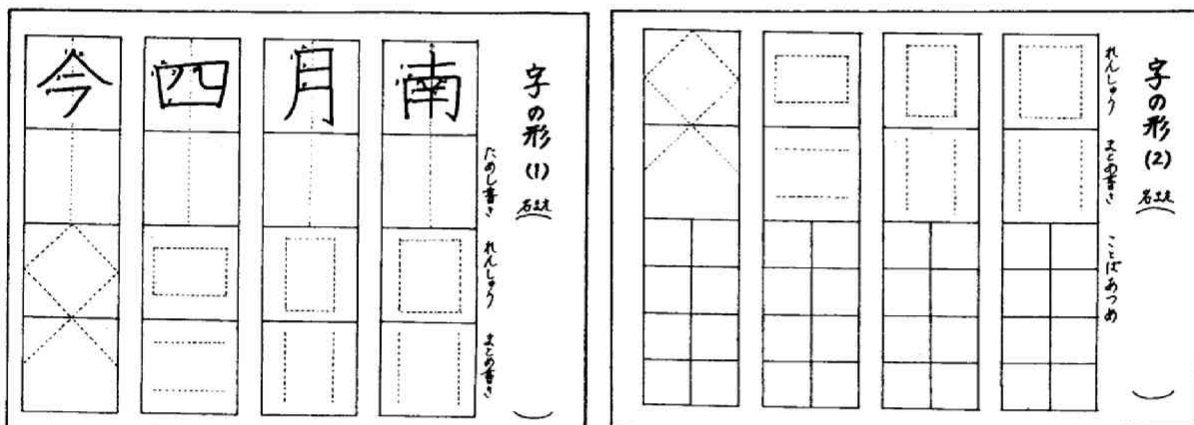


(書き込みをする児童)

(2) 基礎・基本を身に付け活用できるためには、基準を知った他の字に活用する力を育てていくことが重要である。

外形を意識すると、その後の片仮名の学習でも外形を意識するようになり、整った字を書こうと努力する姿が見えて来た。また、基礎・基本を身に付けるには、練習用紙の活用が効果的であった。

今後も、この画面の指導の工夫を充実させて行きたい。



既習文字の練習

<小学校 第3学年>

- 1 単元名 点画の方向
- 2 教材 「火口」
- 3 単元設定の理由

児童は、毛筆において「おれ」、「はらい」、「点」の書き方について、既に学んできている。それらを基にして、ここでは、「火口」という文字を練習することによって、さらに筆使いに慣れさせるとともに、点画の方向に着目させ、字形の整え方を学ばせていく。

児童の書いた文字の課題の一つに、点画の長さや方向が正しくないために生じる「字形の崩れ」がある。「点画の方向」の指導では、文字によって払いの方向が異なることや、同じ文字でも払いの方向一つで形が大きく変わってしまうので、丁寧に指導していく必要がある。

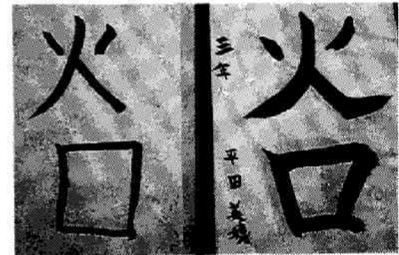
そこで、分解文字などの操作活動を取り入れながら、「点画の長さ」や「点画の方向」に着目し、字形を整えて書くための基本的な見方を育てたいと考え、本単元を設定した。

(1) 自ら考えるための指導の工夫

- ① 学習過程を工夫して一人一人が自分の課題に向かって確かな練習ができるようにする。
- ② 操作しやすい分解文字や作業板を使い課題を発見しやすくする。
- ③ 課題を克服させるため、いろいろな練習用紙を用意する。
- ④ 学習前と学習後の作品を並列掲示し、学習の成果を実感し次への意欲がもてるようにする。

(2) 基礎基本を身に付け活用できる指導の工夫

- ① 作業板付分解文字の操作活動で課題を発見しやすくする。
- ② 課題を克服させるため、いろいろな練習用紙を用意する。



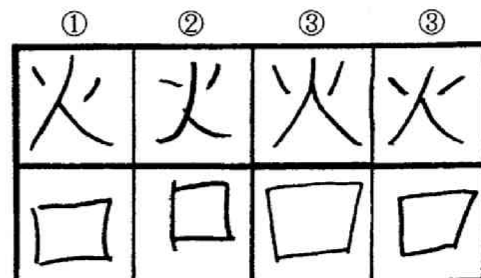
4 児童の実態

習字を習っている児童は数名いるが、半数以上の児童は3年生で初めて筆を持っている。用具の始末などに時間がかかるなど、気になるところはあるものの、毛筆そのものに対しては、好きな児童が多い。しかし筆使いなど、まだ十分自分のものになっていないため「こうしたい」と思ったことが、なかなか実現できないでいるのが現状である。

また、ここで扱う払いの方向や長さについては、日常の文字の中では、あまり意識して書かれていないことが多い。

《文字例》

- 点の方向や位置が正しくない例 ①
- 右払いの位置が高すぎる例 ②
- 左払いが広がりすぎている例 ③



5 単元の目標

- 「点」、「はらい」、「おれ」の方向の違いを理解し、字形を整えて書くことができる。
- 毛筆で学んだことを硬筆に生かそうとする。

6 指導計画（5時間扱い）

第1時 四つの左払い、二つの右払いの方向について理解し、払いの方向に注意して「火」を練習する。（本時）

第2時 折れの方向を理解し、折れの部分に注意して「口」を練習する。

第3時 点画の方向に気を付けて「火口」のまとめ書きをする。

第4時 平仮名、片仮名の筆使いや、字形の違いに注意して語句を練習する。

第5時 左払いの方向、折れの方向に注意して、漢字や語句を練習する。


7 本時の指導（5時間扱いの1時間目）

(1) 目標

- 点や払いの方向に注意して「火」を書くことができる。
- 自分なりのめあてを持って取り組む。

(2) 展開

過程	学習活動	教師の支援・留意点	主題との関連
つかむ	1. 「火口」という文字を書くことを知る 2. 試し書きをする。 3. 自分の書いた文字と教科書の教材文字との違いを比べる。 4. 本時の学習のめあてをつかむ。	<ul style="list-style-type: none"> • 教科書を見ないで書かせる。 • 各自が自分の文字と教科書の教材文字の違いを見つけられるよう助言する。 • 本時では「火」だけを練習することを知らせる。 	自ら考える
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> 点やはらいの方向に気を付けて「火」を書こう。 </div>		
ふかめる	5. 「火」の分解文字を操作して、点やはらいがどうなっているのか調べる。 6. 気づいたことを発表しあい教材文字への理解を深め、自分の課題を見つける。	<ul style="list-style-type: none"> • 試行錯誤を繰り返しながら、課題に気付かせる。 • よく考えられるよう、十分に時間を与える。 • 本時の内容にかかわることにポイントをしぼる。 • 確認事項 	基礎・基本 自ら考える 基礎・基本

ふ か め る ま と め る	 <p>(分解文字を操作する児童)</p> <p>7. 自分の課題にそった練習用紙を選んで「火」を練習する。</p> <p>8. 課題を意識しながら「火」の文字を書く。</p> <p>9. 試し書きと比べながら、学習の成果を確かめ合う。</p> <p>10. 次時は「口」について学習することを知らせる。</p> <p>11. 後片づけをする。</p>	<p>●確認事項</p> <p>◆点は、対応するように内側に短く。</p> <p>◆左払いは、一・二画目を通り過ぎてから曲がり、一両目より外へ広げて払う。</p> <p>◆四画目の右払いは、止めてから払う。</p> <p>●いろいろな課題に合わせた練習用紙を用意して、自分に合った用紙を自分で選ばせる。</p> <p>●個別指導をする。</p> <p>●文字の基準を確かめながら、丁寧に書くよう促す。</p> <p>●観点にそって、お互いの学習の成果を話し合わせる。</p> <p>●自分や友達のよさを見つけて認め合い、自信をもたせるようにする。</p> <p>●「口」についても同様に練習していくことを知らせ、学習の見通しを持たせる。</p> <p>●用具などの後始末を丁寧にさせる。</p>	<p>自ら考える</p> <p>自ら考える</p> <p>基礎・基本</p>
--	---	---	--

(3) 評価

- 点の方向、はらいの方向についての自分の課題が達成できたか。
- 自分の課題をもって取り組むことができたか。

8 考察

- (1) 自ら考えるための指導では、「児童が自分の進歩を確認できること」「教師の指示が児童の活動をよりし易くするために具体的であること」が、意欲を持続させたり考えさせたりしていく上で大切なことである。
- (2) 基礎・基本を身に付け活用できるための指導では、児童のわかること・実際にできることの間にあるギャップを埋めていくための教師の的確な指示が必要である。そのために教師は教材研究をより深め、支持のキーワードをきちんと押さえることが重要である。

<小学校第6学年>

1 単元名 文字の大きさと字配り

2 教材 ・毛筆教材「星ふる夜」 ・硬筆教材「俳句」、「やまなし」

3 単元設定の理由

第6学年の書写学習においては、「文字の形、大きさ、配列などを理解して書くこと」を中心に指導することとしている。

児童が日常生活の中で文字や文章を書くとき、一つ一つの文字の形に気をつけて書くことはできても、文字の大きさや配列を整えて書くことまでは、なかなか意識が及ばない。そのため、より読みやすく整った書き方になっていないことが多い。配列よく文字を書くためには、文字の中心や行間・文字間を揃えて書くことに加えて、他の文字とのバランスを考えながら文字の大きさに気をつけて書くことも必要である。

そこで、毛筆の学習『星ふる夜』では、仮名は少し小さめに書くと同時に、線を少し太めにして他の文字とのバランスをとることについて児童の理解を促した。そして、毛筆学習で学んでことを短冊や原稿用紙での書写など、硬筆学習を通して確かめ、漢字と仮名の大小、漢字と漢字の大小など、字配りについての基礎的・基本的内容を定着、一般化させたいと考え、本単元を設定した。

(1) 自ら考えるための指導の工夫

- ① 学習のめあてや基準が明確になるように作品やノート例を提示して、児童が自分で課題を具体的にとらえることができるようにする。
- ② 自分の課題を解決するために、試し書きと教科書の文字を比較しながら学習の基準や自分の課題を書き込む活動を取り入れる。

(2) 基礎・基本を身に付け活用できる指導の工夫

- ① 教科書の文字への書き込みや教材の拡大提示、示範などを通して、学習の基準をいつも確かめながら取り組めるようにする。
- ② 児童の課題に応じた練習用紙を工夫し、自分の課題にそって練習に取り組めるようにする。
- ③ 自己評価や相互評価を通して、学習の成果を認め合うことで満足感を味わわせ、書写活動への意欲や日常生活への活用を図るようにする。

4 児童の実態

事前に行った児童の意識調査から「きれいな文字を書きたい。」「読みやすく書きたい。」という願いをもっていることがわかった。しかし、6年生ともなるとポスターや新聞、お知らせなど、日常の活動の中で書く機会が多くなっているにもかかわらず、「丁寧に書いてもうまく書けない。」という気持ちから、書くことへの意欲や興味も薄れがちである。

そこで、毛筆の学習で焦点を絞り学習したことを、硬筆で書く場合の自分の課題として明確にとらえさせたい。さらに、その課題解決の方法や過程を学ぶことで、日常生活における書写活動にも生かしたいと考えた。

5 単元の目標

- 日常生活の中で文字を書くことに関心を持ち、読みやすく整った文字を書こうとする態

度を育てる。

- 文字の大きさに気をつけて、配列よく書くことができる。

6 指導計画（5時間扱い）

第1時 漢字とかなの大きさの違いに着目して『星ふる夜』を毛筆で書き、学習の基準に従って自己評価し自分の課題をもつ。

第2時 前時で得た自分の課題にそって『星ふる夜』を毛筆で書き、練習を通してよくなった点を明確にする。

第3時 毛筆で学習したことを生かして硬筆で俳句を書き、文字の大きさや配列に関する基本的な内容を理解する。（本時）

第4時 文字の大きさや中心に気をつけて、硬筆で原稿用紙に配列を整えて書く。

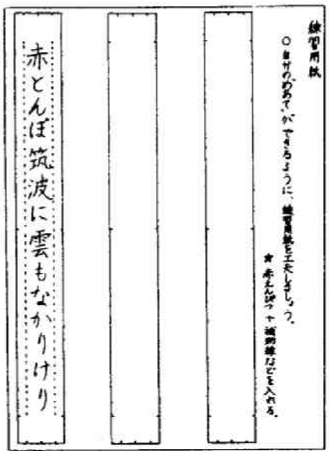
第5時 学習のまとめとして、卒業文集の作文を原稿用紙にまとめ書きする。

7 本時の指導（5時間扱いの3時間目）

(1) 目標

- 文字の大きさや中心に気をつけて、硬筆で配列よく書くことができる。

(2) 展開

過程	学習活動	教師の支援・留意点	主題との関連
つかむ	1. 学習のめあてを知る。	●卒業文集の作品例を提示して、課題に気つかせる	基礎・基本 自ら考える
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 5px auto;">文字の大きさや中心に気をつけて書こう</div> 2. 教材文を聴写し、試し書きをする。 3. 学習の基準を知る	●書き誤りやすい漢字は、板書しておく。 ●試し書きと教科書の文字を比較させ学習の基準について話し合わせる。	
確かめる	4. 自分の課題を明確にし、練習する。	●「めあてカード」に微分のめあてを記入させる。 ●自分の課題にあった練習用紙を作るようにする。 <div style="text-align: center; margin-top: 10px;">  <p>（練習用紙）</p> </div>	基礎・基本 自ら考える

ま と め る	5. まとめ書きをする	<ul style="list-style-type: none"> ●教師の示書により学習の基準を再確認し自分のめあてにそって丁寧に書くように指示する。
	6. 基準に照らして相互評価する。	<ul style="list-style-type: none"> ●試し書きと比べながら、よくなった点を評価し合うようにする。
	7. 次時の予告をする	<ul style="list-style-type: none"> ●原稿用紙に書くことを知らせ、次時へのめあてをもつよう助言する。

(3) 評価

- 自分の課題に気づき、課題に取り組みながら配列よく文を書くことができたか。

8 考察

(1) 自ら考えるために

学習の基準について考えさせるため、「文字スケール」を用いて試し書きと教科書の文字とを比較させ、自己評価できるようにした。それによって、児童一人一人が自分の文字について課題となる点に気づくことができ、個々の課題に応じためあてをもつことができた。

また、練習の段階で自分の課題を解決するために、各自で工夫しながら補助線などが書き込める練習用紙を用意した。児童は自分のめあてに沿って、中心線を引いたり、用紙の上下に余白を作ったりして個々に工夫していたが、課題を解決するために必要な補助線が引けなかったり、練習用紙の作成に時間がかかってしまったりする児童も見られた。そこで、あらかじめ数種類の練習用紙を用意して、個人差に応じて選択できるように支援することが必要である。

(2) 基礎・基本を身に付け活用できるように

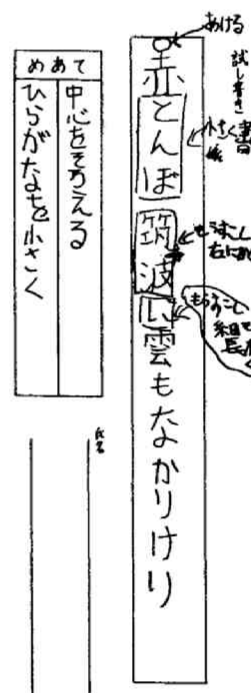
学習の基準の話し合いでは、「文字の大きさや字配り」に関することに加えて、「文字の中心をそろえて書く」ことに気づくことができた。しかし、自分の練習用紙を工夫させると、児童の関心が文字の大きさや字配りに集中したために、中心線を引かずに練習に取り組む児童が見られた。

日常の書写活動において、読みやすく整った文字が書けるようになるためには、書写学習の中で、文字や行の中心についての意識を定着させることが大切である。そのためには、今回用いた「文字スケール」や練習用紙、また、教師の示書など、基礎・基本を身に付ける学習段階では、児童が常に文字や行の中心を意識して取り組めるように、中心線を引いたものを用意することが望ましい。

《文字スケール》
を利用した評価



《試し書きカード》



<中学校 第1学年その1>

- 1 単元名 楷書
- 2 教材 「新緑」
- 3 単元設定の理由

中学校学習指導要領（第1学年）の指導事項に「漢字の楷書とそれに調和した仮名に注意して書き、漢字の行書の基礎的な書き方を理解して書くこと。」と示されている。これを踏まえ、1学期に小学校での学習を発展させ、楷書の特徴を再確認すると共に正しく整った文字を書く習慣を身に付けることを目指した。

2学期になると中学校の書写学習の重要な目的である行書を学ぶことになる。それ以前に、もう一度基本に戻り、正しい姿勢・基本点画の筆使い・送筆に注意する態度が必要である。学習のねらいを各自が理解し、より整った読みやすい文字が書けるように、自ら考えて書写することで、意欲を高めたい。日常の書写活動が急に増加する中学生であるが、書くことを苦にせず日常生活で活用できるようにと本単元を設定した。

4 単元の目標

- (1) 楷書の筆使いや字形の整え方を理解し、確実な筆使いで伸び伸びと書くことができる。
- (2) 文字の左右の大きさや組み立て方などに注意して書くことができる。
- (3) 書写するときに許されている点画の形を理解して書くことができる。
- (4) 毛筆の学習を生かして、字形と筆順に注意して硬筆で書くことができる。

5 生徒の実態

小学校までの書写学習に既に個人差があることは避けられない。しかし、中学校での学習に対して前向きな姿勢が強く感じられる。また、より整った読みやすい文字を書きたいと願い、その為に何が大切なのかを自分なりに考えている。そうした意欲を持続させて学習できる工夫を大切にしていきたい。

6 指導計画（6時間扱い）

- 第1時 書写の時の姿勢を確認し、基本点画の筆使いを練習して理解する。
- 第2時 基本点画の筆使い、始筆・送筆・終筆の筆使いに注意して「四季」を練習する。
- 第3時 前時の学習から概形や上下の大きさに気づき、それらに注意して「四季」をまとめ書きする。
- 第4時 文字の左右の大きさや点画の方向に注意して「新緑」を練習し、基準に従って自己評価する。
- 第5時 前時の学習から自分の課題をつかみ、さらに偏とつくり・難しい筆使いに注意して「新緑」をまとめ書きする。（本時）
- 第6時 字形の整え方を理解して、硬筆で楷書のまとめをする。

7 本時の指導（6時間扱いの5時間目）

(1) 目標

- 前時の作品と教科書の文字を比較して、自分の課題をつかみ、難しい筆使いにも注意して書ける。
- 全体のバランスも考えてまとめ書きし、自分の文字を評価することができる。

(2) 指導計画

	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	主 題 と の 関 連
導 入	<ul style="list-style-type: none"> ●前時までの注意を確認する。 ●前時の作品と教科書の文字を比較して自分の課題を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ●基本的筆使いや文字の大きさ、全体のバランスを確認させる。 ●添削したものから自分の課題を見つけさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●自ら考える
展 開	<ul style="list-style-type: none"> ●試し書きをする。 ●試し書きと教科書の文字を比較する。 ●「新」を練習する。 ●「緑」を練習する。 ●示範を見る。 ●まとめ書きをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ●注意すべき例を提示して自分の課題を明確にさせる。 ●偏の右側をそろえ、横画はやや右上がりに書き、その長さに注意させる。 ●偏を狭く、つくりを広くすることに気づかせる。 ●点、止めに注意させる。 ●水書板に注目させ、穂先に注意させる。 ●名前の書き方を確認させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●基礎・基本を身に付ける ●基礎・基本
ま と め	<ul style="list-style-type: none"> ●自己評価する。 ●次時の課題を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ●注意事項や自分の課題が解決できたか自己評価させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●自ら考える

(3) 本時の評価

- 自ら考え自分の課題に気づき、意欲的に取り組めたか。
- 楷書の基本点画や文字の大きさに注意してまとめ書きすることができたか。
- 自分の文字を適切に評価することができたか。

8 考 察

行書を学ぶ前にしっかりと楷書の基本を身に付けることが大切と考え、この教材に取り組んだ。自ら課題に気づくための手だてとして「教科書の文字をよく見る」「注意すべき例から課題を探す」活動を取り入れたことが生徒の意欲を喚起した。また、達成感や成就感にもつながった。

さらに、自分で見つけた課題がどの程度理解できたかを評価することで、着実に基礎・基本を身に付けることができた。自分で見つけた課題だからこそ、向上心も高まる。今後とも生徒が自分で考える場面を工夫し、常に日常の生活に生かせるよう個々に応じた支援が必要である。

<中学校 第1学年その2>

- 1 単元名 行書
- 2 教材 「汽笛」
- 3 単元設定の理由

中学校学習指導要領（第1学年）の指導事項に、「漢字の楷書とそれに調和した仮名に注意して書き、漢字の行書の基礎的な書き方を理解して書くこと。」と示されている。しかし、読みやすく整った字を速く書きたいという生徒の希望は強いにもかかわらず、日常生活において行書を用いている生徒は少ない。そこで、「読みやすく整った字を速く書ける」行書の特徴を知り、基礎的な書き方を学び、日常の書写活動に生かせるよう本単元を設定した。

生徒は行書について学習するのが初めてであるが、毛筆の筆使いという点になると力の差が甚だしくなりつつある。自分の力に応じた課題を自ら見つけだし、その解決を図ることで成就感を味わい、書写学習への意欲、日常生活での活用へとつなげていきたい。TTによる指導は、個々に応じた課題を解決する支援がしやすく、基礎・基本を身に付けるために必要な筆使いの技能等についても直接指導できる。そこで、研究主題に迫る手だての一つとして活用することを考えた。

4 単元の目標

- 行書の特徴や基礎的な書き方を理解し、自ら考え文字を正しく整えて速く書くことができる。
- 硬筆と毛筆を関連させて学習し、行書を日常の書写活動に進んで生かすことができる。

5 生徒の実態

1学期の書写の授業では楷書及び楷書とひらがなの調和体を取り上げた。小学校で学習してきた基礎・基本の確認からひらがなの持つ曲線のやわらかさを学習し、2学期に学習する行書への準備を進めてきた。生徒達はその時学習する教科書の文字については整った字を書く努力をしている。しかしその学習が日常の書写活動に生かされない傾向がある。それは与えられた課題の解決のみに終始する受け身の学習に問題があるのではないかと考えた。そこで自ら課題を見つけ解決をはかれるよう、考えながら学習を進めていく単元の発展を工夫した。

6 指導計画（8時間扱い）

第1時 楷書と行書の違いに気づき、行書の筆使い（点画の丸み、点画の形や方向の変化）を理解して、練習する。

第2時 前時の学習を深め、教科書の文字「天体」を練習・まとめ書きし、基準に従って自己評価して良くなった点を明確にする。

第3時 第1時・第2時の学習をもとにして、行書の筆使い（点画の連続）・字形の整え方について理解し、「汽笛」を練習する。できあがった作品を自己評価し、次時での課題を明確にする。

第4時 第3時で見つけた各自の学習課題をポイントにおいて「汽笛」を練習し、行書の基本のまとめをする。（本時）

第5時 行書の筆使い（点画の省略の仕方・筆順の変化）を理解し、「紅葉」を練習し、基準に従って自己評価する。

第6時 前時の学習を深めるとともに、字形の整え方に注意して「紅葉」を練習・まとめ書きして自己評価をする。

第7時 毛筆の学習を生かして行書の書き方と字形の整え方を硬筆で練習する。…学級内の生徒氏名を題材にして。

第8時 毛筆の学習を生かして行書の書き方と字形の整え方を硬筆で練習する。…四字熟語（国語資料集）を題材にして。


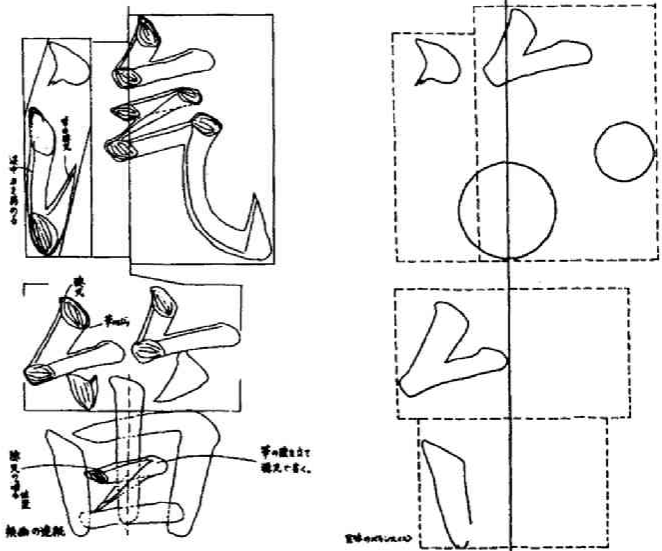
7 本時の指導（8時間扱いの4時間目）

(1) 目標

- 前時に見つけた自分の課題解決に努力し、行書の筆使い（点画の丸み・形や方向の変化・連続と字形の整え方を理解して書くことができる。
- 自分の文字に対して適切に評価できる。

(2) 展開

	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	主 題 と の 関 連										
導 入	<ul style="list-style-type: none"> • 自分の課題を明確にする とともに友人の課題を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> • 第3時の生徒作品に書かれた「次の時間はどこに注意して書くか」をあらかじめ類型化して座席をまとめておく。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <table style="width: 100%; text-align: center; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;">課 題 別 班 座 席 表</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 150px;">教 卓</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 100px;">① さんずい 8人</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 100px;">③ 点画の 連続 5人</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 100px;">⑥ 全体の バランス 7人</td> </tr> <tr> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;"></td> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;"></td> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;">② たけかぶり 7人</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;">④ 汽の字形 6人</td> <td style="border: 1px solid black; padding: 5px;">⑤ 汽の字形 5人</td> </tr> </table> </div> <ul style="list-style-type: none"> • 生徒が見つけた課題を説明しながら、前時で見られた注意すべき点を明らかにし、第1時から第3時までの復習をさせる。（T1） • 教材文字「汽笛」の基準を再確認させる。（T2） 	課 題 別 班 座 席 表	教 卓	① さんずい 8人	③ 点画の 連続 5人	⑥ 全体の バランス 7人			② たけかぶり 7人	④ 汽の字形 6人	⑤ 汽の字形 5人	<ul style="list-style-type: none"> • 自ら考える • 基礎・基本を身に付ける
課 題 別 班 座 席 表	教 卓	① さんずい 8人	③ 点画の 連続 5人	⑥ 全体の バランス 7人									
		② たけかぶり 7人	④ 汽の字形 6人	⑤ 汽の字形 5人									

<p>展 開</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●自分の課題にそって練習する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●T1・T2はあらかじめ担当グループを決めて、生徒の練習を支援する。その際同時進行で、 分解文字・手を添えた筆使いの練習 課題にあった練習用紙・水書板・拡大文字・実物投影機等 を利用して指導に当たる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●自ら考える ●基礎・基本を身に付ける
<p>ま と め</p>	<ul style="list-style-type: none"> ●まとめ書きをする。 ●自己評価をする。 (2, 3名成果を発表する。) ●次時の予告を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ●学習の基準を再確認し、丁寧に書かせる。 ●自分の課題について教科書の文字・前時の作品・本時の練習と比較して、良くなったところに○をつけさせる。自分の課題以外でもうまくいったところには○をつけさせる。 ●自己評価カードにも記入し、成果を確認させる。 ●次時へのつながりを確認させる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●自ら考える ●自分の課題 解決～意欲の向上～日常生活への活用 ●第7・8時硬筆の学習まで意識させ、活用へと発展させる。

(3) 評 価

- 自分の見つけた課題を解決するために努力できたか。
- 行書の筆使い（点画の丸み・形や方向の変化・連続）と字形の整え方を理解して書けたか。
- 自分の文字に対して適切に評価できたか。

8 考察

(1) 課題別によるグループ学習について

教材文字「汽笛」について、第3時の自己評価に基づいて次時の自己の課題（どこを最も注意して書きたいか。）を提出させ、教師側であらかじめ類型化し6つのグループに分けておいた。（例 ①さんずい ②たけかんむり ③点画の連続 ④⑤「汽笛」のつくりの形 ⑥「汽笛」全体のバランス）同じ課題を持った生徒を集めることによって、課題に応じた直接的な指導がしやすくなり、細かい穂先の動きまでグループごとに示範したり、直接筆を持って指導することが可能になった。また、自己評価の段階でも自発的に相互評価を行っている様子が見え、課題意識がお互いに明確になった。しかし、教室が狭く机間に余裕がないため伸び伸びと書けなかったり、ともすると集中力を欠いたので、学習過程の中にグループ学習を効果的に取り入れていく必要性を感じた。

(2) TT（チームティーチング）について

主と従という関係のTTではなく、どちらも主になるTT授業展開を試みた。本時では生徒が挙げた課題の分析から、T1（①さんずい、②たけかんむり ③点画の連続）、T2（④⑤「汽笛」のつくりの形 ⑥「汽笛」全体のバランス）の2点を役割分担した。そして全体的な説明から班ごと、個人への指導もその分担を基本として同時並行的に行った。その結果、個々に応じた指導がより可能となったことと、教員側の指導の意図が明確であった分、生徒の目的意識も高まり意欲的に学習に臨む姿が見られた。

(3) 教材・教具について

実物投影機は、課題を見つけやすい文字をあらかじめ書いておき、それをモニターに写し出して悪い点を上げさせ修正を加えるのに役立った。その場で書き込めるという利点がある。

拡大文字はあらかじめ黒板に貼っておき、中心線や基準になる形など書き入れておくと、常にそこに戻って確認することができる。

水書板による示範は、筆順や筆の大きな動きを見せるのには役立つが、具体的な筆使いの指導は直接手を添えて書くことより効果的である。

分解文字・トラペンシートを使って文字の形の指導を行った。分解文字は折れの角度の違いなどを気づかせるのに有効だった。

練習用紙については、個々の課題に対応できるように種類を多くしたが、ともすると練習用紙に頼ってしまい考えて書くことがおろそかになってしまう。使う種類を限定し、練習用紙を経て半紙への練習に進ませた。

(4) 評価について

自分の課題意識が明確になり、グループが同じ課題をもっているので自己評価と相互評価を自発的に行うという利点が見え、お互いの上達を確認しあえた。しかし、自分の課題解決に努めた結果、その部分には成果が現れているが文字全体のバランスとしては上達が見えずにがっかりしてしまう生徒もいた。課題箇所の上達を認め、意欲を高めていくよう作品の掲示の仕方や自己評価の方法など工夫の必要性を感じた。また、書写の学習は時間に追われがちで、自己評価カードの記入まで時間内にできない。評価のまとめまでを十分に行うという課題が残っている。

V 研究のまとめと今後の課題

今年度は「自ら考え基礎・基本を身に付け活用できる書写指導の工夫」というテーマで、研究を進めてきた。研究を進める視点を、①自ら考えるための指導の工夫②基礎基本を身に付け活用できるための指導の工夫とし、実践と討議を重ねてきた。

今年度の成果として、次のようなことが考えられる。

- (1) 効率よく考えさせるために、児童・生徒が課題を把握しやすい文字を提示することにより、自分の文字と教科書の文字との違いに気づくことができた。また課題を意識して意欲をもって取り組むことができた。
- (2) 視聴覚機器（OHP、実物投影機等）や具体物（分解文字、拡大文字等）を効果的に活用することにより、文字の基準が明確になった。
- (3) 課題別の練習用紙を使用することにより、課題解決のための主体的な取り組みができた。
- (4) 教科書に補助線や外形を書き込む等の思考活動を取り入れたことにより、学習課題にせまることができた。
- (5) 課題別グループの学習形態にすることにより
 - 自発的な自己評価や相互評価が随時見られ、自らの課題に挑戦していこうとする意欲が見られた。
 - 課題達成のための指導・助言がスムーズに行われ、効果的な指導ができた。
- (6) 課題に向かって取り組む過程を大切に評価することで、課題克服の喜びをもち、意欲的な活動が見えた。
- (7) ティームティーチングによる指導は個々の課題に対して、きめ細かな支援ができ効果を発揮した。
- (8) 基礎・基本の重要性を再確認できた。

今後の課題として、次のことが考えられる。

- (1) 正しい字形、筆順で文字を書きたいという児童・生徒の願いを実現するため、日常の書写活動に生きる継続した研究が必要である。
- (2) 課題解決のために、自ら考え練習用紙を工夫できる具体的方策を追求していく必要がある。
- (3) 意欲を高める作品の掲示の仕方や、自己評価の方法について工夫改善していく。また自己評価カードの記入をいかに一単位時間の中で効率的に進めるか検討していく必要がある。
- (4) 授業充実のため、多人数で活動が制限される場合は、多目的ホールなどの活用が望ましい。
- (5) ティームティーチングによる指導法の研究を今後深めていく必要がある。